

## イ

スラエルに4カ月滞在して、東京に帰る前に数日間パリに立ち寄ってみると、アラブ映画祭の真つ最中だった。2年に一度、セーヌ川に面して立っている国連ビルのようなアラブ世界研究所を中心に開催される映画祭のことである。ただちにプログラムを取り寄せてみると、今年はいラク映画を20本ほど特集するという。これは大変だ。

のんびりと美食に舌鼓したづまなど打っている場合じゃない。ただちに研究所に行ってプレスパスをもらい、毎日せっせと会場に足を運ぶことになった。

アラブ世界で映画産業がもつとも古くから確立され、いわば中心的存在となっているのは、エジプトである。モロッコからシリアまで、他の国々もそれなりに制作を

続け、国際映画祭に出品などしているが、撮影所を設けて恒常的に娯楽映画を制作してきたのは、やはりカイロである。わたしは素朴にそう思っていたが、実はバグダッドにも撮影所体制が存在して、半世紀を越す制作の歴史をもっていることを、今回知らされた。

現存するもつとも古いイラク・フィルムは、アンドレ・シヤタン監督の『アリアとイサム』（1948年）である。いかにも『千夜一夜物語』の世界から出てきたといった衣装と雰囲気きふきの姫と若者が、ロミオとジュリエットのように、部族どうしの争いのなかで恋を成就させることなく死んでゆく。日本や韓国の新派メロドラマに通じる世界である。

今回のイラク映画特集では、その後1970年代に撮られたドキ

ュメンタリーを含め、フセイン政権下で国外に亡命を強いられた映画人たちがフランスやスイスの資金を得て撮りあげた作品までが集められ、実に多彩な内容だった。フセイン政権下でクルド人の町に化学兵器が投下され、痛々しいケロイドを顔に

受けながらも生きてゆく少女と、長らくアメリカに亡

命して帰国した中年男の心の交流といったフィルムもある。会場となった映画館の前には亡命イラク人たちが集まり、抱擁しあつたり、お喋りに耽しづっている。パリという大都市にアラブ文化がすでに構造化されて存在するようになって久しいが、それは心を和ませる光景だった。

パリの  
アラブの  
映画祭

よ も た い ぬ ひ こ  
四方田犬彦

明治学院大学教授

をちこち散歩

@Paris